



バスに貼られたボランティアの皆さんからのメッセージ

●ボランティアバスの合同運行

第1回	4月19~23日	大阪市社協運行
第2回	4月25~29日	大阪府社協運行
第3回	5月10~14日	堺市社協運行
支援先	宮城県石巻市	



泥で真っ黒になった床をきれいに



庭の汚泥を手でかき出します

着いてくると「髪を切ってほしい」というご近所からの依頼があり、店の再開をあきらめかけていたSさんご夫婦ですが、「長年、店に通ってくれたお礼にボランティアで散髪」することを思い立ちました。奇跡的に鏡と洗髪台が破損せずに残ったことも、Sさんの決心を後押ししたようです。

そんなご夫婦の思いを知ったボランティアたちは、精力的に店内のがれきを除去し、傷んだ天井部分も修理。洗髪台をいねいに井戸水で洗うなどの作業を手伝いました。翌日、ボランティアが再び訪ねると、「昨日、以前から頼まれていたお客さんの散髪をしたら、それは喜んでくれました。これも皆さんのおかげです」と奥さん。

さらに、「今日もみんなが来てくれると思うと、朝起きるのも何だか張り合いが出てね。いつ終わるかかわからない片づけを父ちゃんとうたりだけでやるのは辛いもんだから…」とも話されます。最終日は他の班も加わって片づけましたが、やり残したことも多く、心残りの結果になっしまいました。にもかかわらず、帰り際、奥さんは涙ぐみながら、何度もお礼を言うてくださいました。

また、こんなこともありました。Fさん宅でボランティアが泥だし作業をしているときです。Fさんが突然、「あっ、生きてた! 生きていた!」と声をあげました。見ると一匹のハムスターが押入れの物陰から顔を出していたのです。それは「マツク」と名づけられたFさんのお子さんが可愛がっていたペットでした。どこを探してもみつからず、あきらめていたというFさん。「早く避難所に帰って子どもに見せてやりたい。マツクを見たらどんなに喜ぶことか」と、声を弾ませます。震災から48日。「よく今まで生き延びた!」「すごい生命力!」と、自然と拍手が沸き起こります。なかには感激のあまり思わず涙ぐむ人もいて、予期しないうれしいできごととなりました。

2日間の懸命の作業で、四十九日の法要を実現

震災で50人もの檀家の方が亡くなり、寺も大きな被害を受けたのが湊町にある松蔵寺。「四十九日の法要を何とか寺で行いたい」と、境内の片づけの依頼があり、2つの班が合同で活動にあたりました。けれど、四十九日にあたる4月28日までは2日しかありません。「はたして自分たちにできるか不安だった」と岡野和行さん。それでも、みんなで力を合わせた結果、法要は無事に行われ、住職をはじめ寺の皆さんから何度もお礼を言うていただきました。

「初対面の人間同士でも、役に立ちたいとの思いから一致協力して懸命に活動する。普段の生活では得がたい経験で、私も自然と力が湧いてきました」と岡野さん。それは多くのボランティアが感じたことでもありました。「若い人がこれほど懸命に働くとは、驚きです。今どきの若者は…と批判するのはやめましょうと思いましたが」と最年長の吉岡眞吾さん。そして、「消防士の私でさえ、みんなの働きぶりには脱帽した」と話すのは片岡創さん。「だれかのために、ここまでできる! 復興はきっと早い」とまで感じたそうです。

現地での3日間の活動をすべからず、大阪へ帰るバスで終え、一路、大阪へ帰るバスのなかでは、「息の長い支援が必要!」「もっとボランティアバス



大半の人がボランティアは初体験。元気で3日間の活動を終わりました

を出してほしい!」「またボランティアに来ます!」「石巻が早く元気を取り戻し、遊びに行ける町になってほしい」と、さまざま意見が出されました。

短い期間だったにもかかわらず、多くのことを体験し、考え、悩んだボランティアの皆さん。「大阪へ帰ったら、より多くの人にこの体験を伝えて、支援の輪を広げていきたい」という声に、みんなが大きくうなずいていました。